# 明夷待訪錄當作集（續）

宮崎市定

先に本誌に「明夷待訪錄當作集」を掲載してから、これを携えて渡獨し、ハンブルグ大學のSeminar für Sprache und Kultur Chinas において、少數ではあるが熱心な學生たちと、待訪錄を講讀する時の參考に供した。ところが講讀が進行して行くうちに、隨處に理解に苦しむ難句に出會って、待訪錄の字句の誤謬は更に根深い所から發生していることを改めて認識しなければならなくなった。そこで前の「當作集」を增補して、（續）を作成したが、或いは更に（二續）（三續）をも補足しなければならなくなるであろう。人或いはその餘りに穿鑿に過ぎるを疑う者があるかも知れないが、余をして言わしむれば、いかなる名論卓說にもあれ、それが誰にも判らない文章であるならば、それは三文の値打ちもない。判ってこそ始めて思想というに値いするのである。凡そ、それほど古代の文獻というでもなく、つい近世になって書かれた文章で、專門の學者が何人かかっても讀めないという場合には、それは明かに文章の方が惡いのである。讀者はそれを訂正して讀む權利がある。たしか顧廣圻であったか、「字が間違っているから讀めぬという位ならば、初から本など讀もうとせぬがよい」と廣言したそうだが、實は談、何ぞ斯く容易ならんや。傳來の文章を誤謬と見當をつけ、その代案を提出するには、餘程の苦勞と決斷とがいるものだ。これは實際にやった者でなければ分るまい。しかもその結果は恐らく、コロンブスの卵と同樣、世人は卵の立ったことを賞するよりも、卵の殼を少しでも凹ませた點を責めるに違いない。それでもなお且つ、この「當作集」を發表する所以のものは、後人

に對して同じ苦勞を二度とさせまいと思う親切心からに外ならない。

底本には臺灣新興書局の覆指海本を用いたこと前回と同じ。但し頁付は本文から數え始めたので、覆指海本に比し、六頁ずつ減じた數になっている。

①八頁三行。不能勝天下欲得之者之衆。當作・不能勝天下之大。欲得之者之衆。

覆指海本は天下の下で句讀、古籍出版社本は一氣に讀み續ける。口調から言えば前者が勝り、論理からいえば後者がすぐれる。但し後者の場合も、天下と欲得之者との結合が必然的でない。黃宗羲の口吻から言えば、當に「天下之大」として、その下に讀點を打つべきであろう。Apposition は中間で息をつくことができるからである。この所は少し前にある

豈天下之大。于兆人萬姓之中。

の句の口調、及び次章に出る句

緣天下之大。非一人之所能治。

の意味と比較するとよく判ると思う。

②八頁九行。是以危吾君也。足以危吾君也・之譌。

③九頁八行。足不履地曳木者。下三字當削。

このところ若し原文のままで强いて讀もうとすれば、

若手不執紼。足不履地曳木者。唯娛笑於曳木者之前。

從曳木者。以爲良。而曳木之職荒矣。

若し手は紼を執らんとせず、足は地を履みて木を曳かんとせざる者ありて、ただ曳木者の前に娛笑し、曳木者に從うのみにて、以て良となせば、曳木の職、荒せん矣。

と解するの外ない。それでも通じないこともないが、三字を衍とするの勝れるに如かず。

④一〇頁二行。乃使草野之應於上者。當作・乃彼草野之應於上者。

この上文に天子より「草野に求むる者は云云」とあり、「乃ち」でこれを受けて後は、當然主格が變って、今度は「かの草野よりして上の求めに應ずる者も亦、云云」とならなければならない。使のままでは、主格が變ったことにならず、依然として天子が主格でなければならず、それでは意味が貫通しない。

⑤一〇頁四行。躋之僕妾之間。當作・躋於僕妾之間。

既にこの前後の文が、草野の人を主格とするならば、原文のままにては、之は自分自身のこととなる。漢文には間々ある用法であるが、むしろ於と改め、「僕妾の間に躋せられて」とする方が自然である。

⑥一四頁七行。夫古今之變。夫古今之法・之譌。

この所に先ず法という字を出しておかなければ、後に出てくる、「聖王之所惻隱愛人而經營者」が卽ち法に外ならぬことが不明瞭になってしまう。

⑦一五頁四行。亦就其外之所得。

諸本多くの外を分に作る。かくて「その分として許されたる範圍の中について」なる解を得る。一應はそれで判ったようであるが、なお考うべき餘地がある。この前後の文脈を案ずるに、

〔第一句〕卽有……〔第二句〕終……

〔第三句〕（卽）有……〔第四句〕亦……

となり、意味の上で、第一と第三、第二と第四とが對句となっている。すると右の解では第二と第四の意味の重さが不均衡になる。第四句には、もう少し重い意味が欲しい所である。そこで甚だ大膽な推測が許されるならば、これを大幅に改造して

亦就其外之所得。似當作・亦爲祖法之所碍。とすれば、前句と均衡がとれてくる。其と祖、外と法、得と碍とは各字劃の上で誤り得べき可能性の範圍内と考えられる。ただ就と爲とは少しく類似性が乏しい感じを免れぬ。意味の上ではこの前に「法祖」の俗論を引いているから、ここへ「祖法」の文字が出ても決して唐突ではない。いま念のため、假定に從った上で、前後を通じて飜譯を試みれば、

非法の法が天下人の手足を桎梏してより、たとい能治の人あるも、終にその牽挽嫌疑の顧盼に勝えず、（たとい）設施する所あらんとするも、亦祖法の碍ぐる所となりて、苟簡に安んじ……

となる。どうもこの方がいいようだ。

⑧一五頁六行。無不行之意。當作・無不行之處。

原文のままでは「行わざるの意なし」としか讀めぬ。當に「行われざるの處なし」と改むべきである。

⑨一七頁三行。國無君長。當作・國無長君。君長といえば、すぐ連想されるのは四夷の君長であり、中國近世

の天子を君長と稱することは恐らく無かるべく、もしあってもそれでは意味が通じない。意味の上からしても、この所は當然、幼君に對する長君、卽ち年長の君主でなければならない。

⑩一八頁一行。視其天子之位去留。位字衍。

⑪一八頁四行。不亦幷傳子之意而失者乎。

當作・不亦幷傳賢之意而失者乎。

この前後に天子傳賢の制が傳子の制と變っても、幸いに宰相に傳賢の制が殘りたるため、天子傳子の制の中になお傳賢の意だけは失われずに存したとし

天子亦不失傳賢之意

といっている。さてその次の段階になると、宰相そのものが消滅してしまったので、その當然の結果として、子に傳えたらばもうそれっきりで、先に殘っていた傳賢の意までが全く失われてきたわけである。從って此所は

不亦幷傳賢之意而失者乎

でなければならぬ。重きは意の字にあり、前段階では、制は失われても意は存したが、今や制と共に、意も幷せて失われたと言っているのである。

⑫二一頁二行。待訪之人皆集焉。訪不必改詔。

諸本多くここを待詔之人と改めるが、若しこれによって前文の待詔者と同一視しようとするならば不可。前の待詔者はいわゆる翰林待詔で、天子の詔命を待機する者。後の待訪之人は、明夷待訪錄の待訪にて、天子より特にその意見を徵せんが爲に招待された者である。上文の「四方より」はここまでかかる。但しその意味を以てこれをも待詔というならば、そういう用法もあることだから構わない。この一段の解釋は極度に重要である。何となれば、黃宗羲の思想態度を解明すべき鍵が藏せられているからである。卽ち彼は聖王の出現を待望し、もし聖王が起って天下を有し、宰相制度を復活し、民間の輿論に耳を傾け、禮を厚くして彼を聘するなら、彼は喜んでその經綸に馳せ參じようという立場をここに表明しているのである。待訪錄の內容は彼にとって空想ではなく、實現可能な具體策であった。さればこそ、字々句々の末からも、彼の迸しるような情熱を感知できるのである。

⑬二一頁六行以下。非謂班朝布令。養老恤孤。訊馘大師旅。則會將士。大獄訟則期吏民。大祭祀則享始祖。行之自辟雍也。

この一段は原文のままだと、相當長文の全文が否定さるべき事柄になってしまうが、こんな文體のあろう筈がない。前後をよく讀みあわせると、これはそうでなく、反って古之聖王の意のあるところ、學校における行事を具體的に列擧した內容でなければならぬ。されば こそ、次に「蓋し」で受けて補足的な說明を加えているのである。されば右の文は

當作・非獨班朝布令。養老恤孤。設或大師旅。則會將士。大獄訟則期吏民。大祭祀則享始祖。行之於辟雍也。

訊馘の二字は特に原のままでは上にも屬せず下へも續かず、宙ぶらりになって甚だ讀みにくい。もちろんこれは禮記王制に

出征執有罪反。釋奠于學。以訊馘告。

とあるによって磨滅した文字を再造したのであろうが、蓋し考えすぎた過失であろう。恐らく最初に設或を訊或と誤まり、次にさる大家が深く考えることなくして、首を付け足すに至りしものか。非獨……設或……は英語における not only, but also と相似たかかり結びで、これで文章も意味もすっきりする。

⑭二三頁三行。其不仕者有刑。當作・其不屈者有刑。

原文の不仕者のままならば、話題が急に一轉して他へそれることになるが、前後を通讀すれば依然として朝廷と學校との衝突自體が問題にされているのである。朝廷が彊壓しても屈せぬから、天下の士大夫を率いる、といわれる。學校騷動の張本人のことに相違なく、單に個人的に出任を嫌う人ではない。この文は更に後に出てくる陳・歐の伏線ともなっている。

⑮二四頁六行。君父則吾誰欺。當作・君父則亦誰欺。

覆指海本等はこの君父を上の君父に續けて、「君父君父と曰う」と讀ませているが、古文の語法として甚だ拙く、待訪錄の他所にもこんな口調は見えぬ所である。

君父とよくいうが、果して本當に父と並稱される君であったなら、どうして子の如き人民を、これ程馬

鹿にしてよいものか。君父たらば則ち亦、誰をか欺かんや。

という意味にとらなければならない。

⑯三二頁二行。源不能潰也。源不能清也・之譌。

⑰三六頁八行。取之不謂嚴乎哉。當作・取之不謂嚴可哉。

このところは助辭を二つ重ねなければならぬほど意味も口調も急迫していない。或いは文字を轉置して、可不謂嚴哉とした方が自然であるかも知れない。覆指海本が文字を轉倒した誤りを犯した例は、五七頁一行

似亦未難爲行。似亦未爲難行・之譌。

に見出される。

⑱四二頁七行。祀事鄉飲酒上下吉凶之禮。當作・祀事鄉飲酒庠序吉凶之禮。

禮曹は學校を掌る。上下というような閑文字を挿んで最も重要な學校を佚する筈がない。

⑲五〇頁五行。視之爲門以內之事也。當作・視之爲門庭內之事也。

門以內でも判らぬことはないが、何だかドイツ語を讀むようである。當に四六頁・四七頁に既用の字、門庭を用うべきである。

⑳五三頁八行。古者十里之內。古者千里之內・之譌。

㉑五五頁三行。將使田既井而後。當作・倘使田既井而後。

㉒六二頁三行。布一疋直錢一千。當作・帛一疋直錢一千。

前文に布帛の語あり、後文に布直六百とあれば、明らかに帛と布の直に差等を設けて記したのである。

㉓六四頁一行。聖王者而有天下。當作・聖王起而有天下。

前文五三頁六行に、有王者起の句あり、これと異文同義、但し起の字は缺くことができぬと思う。最初の三劃が共通な所から誤ったのであろう。

㉔六六頁八行。然且不可。當作・猶且不可。

最後にもう一言、くどいようであるが、「當作集」は私の學問研究態度の根本から發して書かれたものなのである。從來の考證は多く最後的な必然性 Inevitability だけを目標にして行われたように思われる。卽ちもし決定的な證據が見付からなければ、たとい疑問があっても、證據の見付かる迄は何も言わない、オール・オア・ナッシングで

ある。ところが實際は最後的な必然性に到達するまでに、可能性 Possibility 蓋然性 Probality の無數の段階があるのである。この中間的段階の存在を考慮にいれぬと、單なる可能性にすぎぬものを必然性とし、單なる蓋然性にすぎぬものを、さも必然性らしく主張する錯誤が生ずる。ひいてはそれが歴史學の非科學性の論據に利用されては甚だ迷惑である。私の研究法はこのような錯誤や、いわれない非難を避けるために、これからの學者に是非採用して貰いたい、最も科學的な方法であると信じている。

中國の古典と一口にいっても實に多種多様である。日知錄などは誤字を探そうと思っても不可能に近いが、待訪錄は間違いだらけである。特にそれは、ヨーロッパの言葉に飜譯しようとする時によく現われてくる、日本語で何氣なく讀み下し、何氣なく判っていたような氣のする箇所をいざ外國語に譯そうとすると理論上、どうしても訂正しなければ意味の通らぬ場所が出てくるのである。このことは一方に重大な意味をもつ。それは歐米人がやがて中國文の文脈・語法に熟達した曉には、日本人以上に正確にそれを理解するようになるかも知れぬということである。歐米の飜譯を參照した上でなければ口が利けぬということも起り得る。學問の發達はどこで行われようと、望ましいことであるが、日本の東洋學界としてはうかうかしていては世界の進歩に遲れはせぬかと申添えたいのである。

（一九六六年一月二九日、ハンブルグにて）